聖霊降臨後第９主日（特定１４）　　そなえよ、つねに　　２０２２．８．７．

今日の福音書の後半は、「目を覚ましている僕」の話です。主人は婚宴に行って、いつ帰ってくるかわからないのですが、いつ帰って来られてもいいように、目を覚まして準備していなさい。」とイエス様は勧められます。そして、それは、泥棒がいつ入ってくるかわからないようなもので、いつも準備をしておきなさい、ということでしょう。

これは、何を言っているのでしょうか？イエス様が天に昇られた後、もう一度この世に来られる、ということでしょうか。私たちはニケヤ信経や、使徒信経で、キリストの再臨ということを唱えています。

あるいは、私たちがそれぞれ死んで、神様の裁きを受ける、ということを言っているのでしょうか？
先週は、将来のことを考えて大きな倉を建てるつもりになっている、愚かな金持ちの話が出てきました。その人は、自分の命がその晩取られることを知らないのです。このたとえ話から考えて、私たちは、今の安定した生活がいつまでも続かない、ということを知っておく必要があります。その準備をしなさいということを、今日の「目を覚ましている僕」の話は教えているのでしょうか？

今日の説教題を「そなえよ、つねに」としました。これは、ボーイスカウトのモットーですね。

ボーイスカウトのモットーの説明を調べてみました。
『そなえあれば、うれいなし・・、どのようなことが起こっても、それに対する準備ができていれば、心配することはありません。スカウトはどんなことに出会っても、必ずやり通せるという準備が常になされているぞという意味で、心身、技能ともに「すき」のないよう、どんなことにもすぐに応じられる心がまえ、身構えをもって、“いつでも、準備はできているぞ、さあこい”という態勢にあることを意味します。このモットーの実践は、ちかいとおきてを守り、日々の善行を実行することによってできるもので、このためには、日常の訓練に励むことによってスカウト技能を十分に研究し、繰り返し練習して自分のものにしておくべきです。

そして最後にこのような説明がありました。
“そなえよ　つねに”とは、ただ未来に備えるばかりでなく、現在のスカウティングに励み、積み上げることが未来の準備になることだということを忘れてはなりません。』

未来に起こることを、今も心がけておくことを教えているのだと思います。この心構えはわかるような気もします。私たちが避難訓練とか、防火訓練をするのも、そのためだということはわかっているつもりですが、どうも現実味に欠けて、その気になれないのです。

ところが、私は、以前修道院の紹介をしたビデオを見て、印象に残ったことがあります。
その修道院は、エルサレムで祈りながらキリストが再び来られるのを待ち望むという目的の修道院らしいのですが、私など、いつ来るかわからないものを待ち続ける、というのは、緊張感が続かないだろうと、思いながら観ていました。

ところが、ナレーターが面白いことを言うのです。

「救い主を待つ生活というのは、救い主が来た時と同じ生活をすることだ。」と解説していました。

「救い主が来たらどうしよう」と想像するのではなく、「もうここに来ているんだ。」と思って生活すれば、未来を期待するのではなく、現在を楽しめる生活になるように思えたのです。

今日の使徒書で、『信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。』と言っていますが、イエス様もマルコによる福音書１１章２４節で、『24:だから、言っておく。祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる。』と言っておられます。

私たちは、未来のことをどうなるだろうか、ヤキモキしながら待つのではなく、先取りしてもうその時が来たんだと、それを現在のこととして、緊張をもってではなく、喜びをもって、生きていくことができるのではないでしょうか。

ですから、「目を覚ましている僕」の話は、主人が帰ってくるのを、緊張しながら待つのではなく、楽しみにしながら、今はもうそれを経験しているんだ、という喜びをもっていることが大切なんだろうと思います。

自分の死ぬ時を待つ生活ということで、以前見て感動した映画があります。これは、映画会でも紹介したことがあるのですが、「最高の人生の見つけ方」という映画です。

場所は現代のアメリカ、ロサンジェルスだったと思います。黒人と白人の二人の初老の男性が主人公。黒人は車の修理工ですが、物知りで、いろんなクイズ番組を見ては、その答えをテレビの回答者よりも早く正解が言えます。大学に入ってすぐ、恋人が妊娠してしまって、新しい生活のために大学を辞めて、以来ずっと家族を養うために働いてきたのです。ところが、健康診断で自分が癌のため余命６か月だと知らされました。そして、ある病院へ入院したのです。

ところが、同じ病室に白人の男性が入ってきます。彼はその病院の経営者であり、たくさんの財産を持っているのですが、やはり癌にかかって、もうこれから先、長生きできそうにない。そんな彼らが、同じ病室にいて、入院生活をしばらくしているうちに、黒人の男性が書いたメモを白人が見つけます。その中には、「世界一の絶景を観たい」「憧れのスーパーカーでレース場をぶっ飛ばしたい。」などなど、いろんな望みを書き出しているのです。理由を聞くと、「大学の哲学の教授が、『死ぬ前にやっておきたいことを書き出してみろ』と言ったのを思い出して、書いている。バケットリスト（棺桶リスト）と呼ばれるものだ。」というのです。

お互いに余命がいくらもないふたりなので、白人の方も気持ちがわかります。
「よし、それじゃ、オレもやりたいことを書き出すから、一緒にこれから挑戦しよう。お金は心配するな。オレが用意する。」ということになりました。

先週は大金持ちが、大きな倉を建てようとするけど、命が取り上げられたら、自分には何も残らないじゃないか。というお話でした。ちょうど映画で、大富豪が癌になって、余命がいくらもないことに気付くと、今までの財産が意味のないもののように見えて来ていたのと似ているでしょう。

ところが、今日の福音書の前半は、その問題への回答のように思えます。

『小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。34:あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。」

大富豪が、財産を蓄えるのではなく、それを使って、目の前の黒人の希望を叶えてやったり、自分自身が死ぬ前にやりたいことのために、その富を使う時、このふたりの人物は、限られた時間の中で、自分は何のために生きているのか、その目的を真剣に考えたのでしょう。それが、彼らの作った、死ぬまでにやりたい、棺桶リストだったと思います。

彼らは、キリストの再臨とか、私たちがやがて与えられる神の国の喜び、というのを意識してはいなかったでしょうが、結果として、神様が与えようとしておられる神の国を垣間見ることができた、ということではないか、と私は思うのです。

私たちも、今本当に喜んで、生活を楽しんでいるか。その喜びが、実はやがて与えられる神の国の先取りのようなものなんだ、という理解をしたいと思います。

私たちが、日曜日の交わりを楽しんでいること。聖餐式ではパンとぶどう酒をいただくのですが、それは天国を先にちょっとつまみ食いしているようなものだ、と教えられたことがあります。

家族の誰かの誕生日だというので、お母さんが一生懸命バースデーケーキを作っている。それを見ていた子どもは、夕方まで待ちきれなくて、ちょっとつまみ食いをしてそれを味わい、楽しみに夕食を待っている。それが私たちの信仰生活ではないかと思っています。

「そなえよ、つねに」は、そのように、もう現実のものとなっているかのように、それを喜びながら待っている生活のことだと、私たちは確信したいと思います。